I 発見されたイヌの骨

第1号犬出土状況（栃木県いわき市　薄磯貝塚）小形で上顎が不良の個体
縄文時代晩期。人骨（小型成人）埋葬跡に近接する。

出土した骨は何を語るのか。

遺跡から出土したイヌの骨は、多面的な情報をこぼす。しかも出土数の少ない貴重な遺物であり、有機物は保存しやすく、時代は歴史以前（はるか昔）を除いて、ほとんどは消滅してしまう。

① 遺骨自体の表面がミネラル成分となり、骨のカルシウムが溶けだしていないため残る。

② 貝塚、墓所のカルシウム分が保護剤の役割をアルカリ性土として、骨が残りやすくなる。

それでは、骨の分析で何がわかるのだろうか。

① 骨の部位、動物の種類を特定。

② 骨の形や長さ、歯の生え方から、当時の年齢、性別、体高・体重・骨格・体型・毛色・特徴・ケガ・疾病の推測等。

このほか、人骨・貝類・植物・動物（哺乳類など）のある骨もある。この発掘調査・研究自体の情報に勝らず、人間の生活や精神的な側面の情報を、考えるヒントを提供してくれる。

目次　CONTENTS

特別展の開催にあたって
目次　凡例

01　I 発見されたイヌの骨
出土した骨はなにを語るのか。
復元された縄文時代のイヌ
復元された弥生時代のイヌ
縄文時代、弥生時代のイヌの特徴
（コラム1）モースが発見したイヌ骨

09　II 埋葬された犬
11　III 遺棄された犬 ―縄文、弥生時代―
（コラム2）土器に残った犬の痕跡
17　IV 遺棄された犬 II ―古墳時代―
埴輪群像のなかの犬
殉死につく犬
古墳に置かれた犬
（コラム3）景観展開で発掘された犬の痕跡
31　V 都のなかの犬
長屋王邸宅にいた犬
犬食に関係する考古資料
宴席のための犬

36　付 論　別府埴輪のなかの動物たち（田高 博）
40　データ　犬形埴輪を少し観察する（清水 豊）

出品資料の遺跡地図
展示資料一覧表
参考文献
協力者・機関一覧表

復元された縄文時代のイヌ

遺跡から出土したイヌの骨を分析し、解剖学や動物考古学的な知見をもとに、その姿を復元した資料がある。ここでは、それらのイヌを見ていこう。

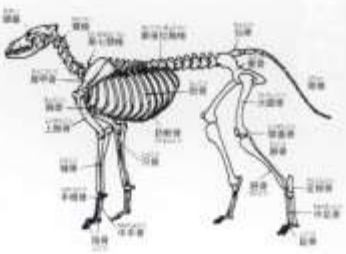
『縛丸（ふじまる）』
（写真上左とも、縛）とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター提供）
このイヌは、道岡神社遺跡（栃木県壬生町）で出土した。イヌの頭骨から復元された。出土状態は、ミニチュア土器・石棒を副葬品として、土坑のなかに埋葬されていた。時期は縄文時代後期（今から約3000年前）。頭骨を調べた結果、性別は不明だが、体高（肩までの高さ）37cm、年齢2歳くらいのイヌと考えられる。骨に人為的な痕跡はない。

この犬の主人はとちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター（栃木県壬生町）ですが、今は宇都宮市の栃木県立博物館で飼われて（展示されて）います。

出土した動物の骨を研究対象する分野を、「動物考古学」という。これは、遺跡から発見された資料を調査することにより、人の暮らしのなかでさまざまな動物のあり方を研究する分野である。その内容としては、動物の種・分布や編年など動物本体を考えていくものと、狩猟・牧畜や食生活など人との関わりのなかからみていく研究がある。

単位：cm	小	中小	中	中大	大
最大頭骨長	〜100	100〜115	115〜140	140〜200	201〜Over
脳頭蓋長	〜80	84〜88	88〜103	104〜113	114〜
最大脳蓋巾	〜54	55〜58	60〜64	65〜69	70〜
顔長N〜P	〜76	77〜84	85〜92	93〜102	103〜
歯長（前臼）	〜64	65〜72	73〜80	81〜88	89〜
上顎巾	〜52	53〜57	58〜62	63〜67	68〜
上口蓋列長	〜52	53〜57	58〜62	63〜67	68〜
下顎骨長（顎）	〜112	114〜124	125〜135	136〜146	147〜
下口蓋列長	〜60	61〜65	66〜70	71〜75	76〜
上腕骨長	〜120	121〜130	130〜140	141〜150	151〜
橈骨長	〜115	116〜130	131〜145	146〜160	161〜
尺骨長	〜140	141〜155	156〜170	171〜185	186〜
大腿骨長	〜135	136〜150	151〜165	166〜180	181〜
脛骨長	〜130	131〜145	146〜160	161〜175	176〜

↑長谷部言人（はせべことんど1882〜1949）解剖学者、人類学者。日本における古代犬の先駆的な研究者でもある。長谷部は、国内で出土したイヌを頭骨・四肢骨の大きさから「小・中小・中・中大・大」とランクに分類した。上表はその計測値をまとめたものである。



↓群馬県内からも縄文・弥生・古墳・平安時代のイヌ骨が出土している。現在のところ、埋葬された状態での発見や人為的な解体痕を認める資料はない。

↓イヌ骨：右（群馬県高崎市　新保遺跡）3点とも（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団提供
イヌの骨は弥生時代後期前半の大溝から出土し、4個体分を確認。上は雄、下は雌と考えられる。

↓イヌ骨：中（群馬県高崎市　新保田中村前遺跡）
2号河川（弥生時代後期）から下顎骨が出土。成獣で、個体の大きさは現生柴犬の雄よりも大きい。

↓イヌ骨：左（群馬県前橋市　元総社宇田遺跡）
奈良時代末〜平安時代の地層より2個体分が出土。そのほか、古墳時代の地層から1個体分を発見。